

toVO トウゴ  
PLUS

www.tovo2011.com

SEASON 2



NO. 016

20130711

あおもりの100家族、わたしたちのこれから。



インタビュー

今号のご家族 ▶ 白取 克之さん・潤子さん・千頌くん・千和ちゃん・トーヴェ  
ちうた ちより  
撮影場所 ▶ 岩木山麓しらとり農場 (弘前)

●2011年3月11日、どのように過ごしていましたか? ▶ 克之さん「昼寝してましたねえ(笑)」  
潤子さん「昼寝の時間でしたね。当時、千和は生後2カ月、千頌は2歳だったんですけど、千頌が遊んで、なかなか寝なくて、そしたら揺れが…。まあ、それでも、ここはそれほど揺れた方ではなくて、何も倒れたりとかもなく『揺れたね』くらいなもので。停電には暗くなってからやっと気付いた。うちはストーブも風呂も薪だし、水は湧き水。ろうそくでの生活にも慣れていたし、不便は感じなかったですね。」  
克之さん「バイオマストイレが攪拌かくはんされなくなったくらいでね。当初は災害や停電の規模すら分からなくて、家族からの電話やラジオで、その規模の大きさを知ったんですけど、それで知り合いの酪農家の事が心配になった。」  
●その後はどのように? ▶ 克之さん「停電で、搾乳できなくなっていたので、翌12日に手伝いに行ったんです。でも、とても手絞りで間に合うようなものではなくて…しかし発電機もない。このままだと牛たちに影響が出てしまうのですが、必要となる三相交流発電機が近場にはなかったんですよ、既に老人ホームなどに借りられていましたので…。そしたら、鯉ヶ沢の、とある鉄工所にあることが分かった。悩みましたね…。トラックの燃料がな

くなるかもしれないんですよ。でも、行かなければ確実に結果は見えている。行きました。そして、なんとか鉄工所まで行けたのですが、今度は、その発電機を動かす為のクレーンも停電で使えなかったんですよ。鉄工所の社長さんが、コンボを駆使して、トラックに積んでくれたのですが、いやあ、ありがたかったですねえ。人の繋がってものを感じましたね。」  
●震災以降、家族で何か話し合ったり、変化したことなどはありましたか? ▶ 潤子さん「う～ん、特にこれといっているわけではないけれど、車の燃料は常に入れておくようにしようね、とは言っていました。あと、電力会社の人たちのありがたさに気付きましたね。原発などあまり良いイメージはなかったんですけど、その末端で働く方々は一生懸命やってくれているんだな、と思うようになりました。」  
●10年後は? ▶ 潤子さん「家族は基本的に変化なしかなあ。ここは農場ってだけではなく、もっといろんな人が来れるような憩いの場になっていけばいいと思います。」  
克之さん「千頌にレストラン作ってって言われました。潤ちゃん(潤子さん)がコックで、俺は『こっちです』とか言うドアボーイ的な役目らしいです(笑) 子供からは『克さん』と呼ばれてるんですけど、その頃には『かつ』って呼ばれてるかもね(笑)」

**定期購読のお申し込み** 1年間の定期購読を承ります。1,500円(送料・寄付金)/1年間(12号)です。ご希望の方は、「郵便番号・ご住所・お名前」を明記の上、メール(info@tovo2011.com)にてお申し込みください。シーズン1(No.000～No.011/12号セット)は、1,500円で販売中です。

**編集後記** 弘前市郊外、岩木山の北東の麓に位置する「岩木山麓しらとり農場」は、自然農(無農薬・不耕起・草生)と有機農業の専業農家だ。「こっちの沢からあっちの沢まで」の広い農地には、かの震災の爪痕は見受けられなかった。しかし、そこに生きる人々の心の中に、その「記憶」は存在していた。3.11を経験した我々の心にも、あの日何らかの種が蒔かれ、そろそろ何かしら発芽しているはず。さて、それをどう実らせましょう?【なるみう】

東日本大地震・津波遺児チャリティー

**tovo** トヴェ

2011年6月～2013年6月25日まで

**¥1,652,865**

を「あしなが東日本大地震・津波遺児基金」へ寄付することができました。ご協力に感謝いたします。

【tovo/トヴェ】は、2011年3月11日の東日本大震災によって、親を失った子どもたちを、青森から支援するプロジェクトです。チャリティーグッズを制作・販売し、その経費を除いた全ての収益を、あしなが育英会「あしなが東日本大地震・津波遺児基金」へ継続的に寄付し、青森から「あなたがたのそばにいつもいますよ」と伝え続けます。ご支援・ご協力を宜しくお願いいたします。



今号のご家族▶白取 克之さん・潤子さん・千頌くん・千和ちゃん・ト  
ーヴェ

撮影場所▶岩木山麓しらとり農場（弘前）

【インタビュー】

●2011年3月11日、どのように過ごしていましたか？

▶克之さん「昼寝してましたねえ（笑）」

▶潤子さん「昼寝の時間でしたね。当時、千和は生後2ヵ月、千頌は2  
歳だったんですけど、千頌が遊んで、なかなか寝なくて、そしたら揺

れが…。まあ、それでも、ここはそれほど揺れた方ではなくて、何も倒れたりとかもなく『揺れたね』くらいなもので。停電には暗くなってからやっと気付いた。うちはストーブも風呂も薪だし、水は湧き水。ろうそくでの生活にも慣れていたし、不便は感じなかったですね。」

▶克之さん「バイオマストイレが攪拌(かくはん)されなくなったくらいでね。当初は災害や停電の規模すら分からなくて、家族からの電話やラジオで、その規模の大きさを知ったんですけど、それで知り合いの酪農家の事が心配になった。」

●その後はどのように？

▶克之さん「停電で、搾乳できなくなっていたので、翌12日に手伝いに行ったんです。でも、とても手絞りで間に合うようなものではなくて…しかし発電機もない。このままだと牛たちに影響が出てしまうのですが、必要となる三相交流発電機が近場にはなかったんですよ、既に老人ホームなどに借りられていましたので…。そしたら、鱈ヶ沢の、とある鉄工所にあることが分かった。悩みましたね…。トラックの燃料がなくなるかもしれなかったんですよ。でも、行かなければ確実に結果は見えている。行きました。そして、なんとか鉄工所まで行けたのですが、今度は、その発電機を動かす為のクレーンも停電で使えなかったんですよ。鉄工所の社長さんが、ユンボを駆使して、トラックに積んでくれたのですが、いやあ、ありがたかったですねえ。人の繋がりがってものを感じましたね。」

●震災以降、家族で何か話し合ったり、変化したことなどはありましたか？

▶潤子さん「う～ん、特にこれといっではないけれど、車の燃料は常に入れておくようにしようね、とは言ってました。あと、電力会社の人たちのありがたさに気付きましたね。原発などあまり良いイメージはなかったんですけど、その末端で働く方々は一生懸命やってくれているんだな、と思うようになりました。」

●10年後は？

▶潤子さん「家族は基本的に変化なしかなあ。ここは農場ってだけではなく、もっといろんな人が

来れるような憩いの場になっていればいいなと思います。」

▶克之さん「千頌にレストラン作ってって言われました。潤ちゃん（潤子さん）がコックで、俺は『こっちです』とか言うドアボーイ的な役目らしいです（笑）子供からは『克さん』て呼ばれてるんですけど、その頃には『かつ』って呼ばれてるかもね（笑）」

【編集後記】弘前市郊外、岩木山の北東の麓に位置する『岩木山麓しらとり農場』は、自然農（無農薬・不耕起・草生）と有機農業の専業農家だ。「こっちの沢からあっちの沢まで」の広い農地には、かの震災の爪痕は見受けられなかった。しかし、そこに生きる人々の心の中に、その“記憶”は存在していた。3.11を経験した我々の心にも、あの日何らかの種が蒔かれ、そろそろ何かしら発芽しているはず。さて、それをどう実らせましょう？【なるみしう】

【寄付総額】2011年6月～2013年6月25日まで、『¥1,652,865』を「あしなが東日本大地震・津波遺児募金」へ寄付することができました。ご協力に感謝いたします。